

年をとるにつれて、きっといつか私も電車で席を譲られる日が来るだろうと思っていました。そして譲られた時には、絶対に断らないで素直に座るようにしようと心に決めていました。というのは車内で自分と同年代の年配者が「いえいえ、結構です。次で降りますから」などと断ってしまい、お互いに気まづくなっている場面を何度も見ていたからです。最近の出来事を考えていると、昔懐かしい出来事が浮かび上がります。

昨年シンガポールで席を譲られる

コロナ騒動前の2019年に、シンガポールへ10日間滞在した時のことです。私は69歳で妻は67歳でした。シンガポールのコバン地区に住んでいる娘家族の孫の様子を見たいということで、私たち夫婦はシンガポールに行くことにしました。コバン駅からシンガポール中心部まで、地下鉄で20分くらい乗るでしょうか。滞在中毎日地下鉄で行ったり来たりしていました。

ある朝10時頃、私一人でいつものコバン駅から地下鉄に乗りました。中心部へ向かう車内の席はすべて埋まっていて座ることができなかつたので、つり革に掴まっていたところ、すぐ前に座っていた若い中国人の男性が、「Take a seat, please」と言って席を立ったのです。突然席を譲られる機会がやってきたのです。予想もしていなかつたのでビックリし気も動転しましたが、なんとか心を落ち着けて小さい声で「Thank you」と言って座ることが出来ました。お互いに眼を合わせニッコリとしました。

座って車内を見回すと、「Show You Care Offer this seat」という、お年寄りや体の不自由な人達へ席を譲ろうというポスターが貼ってありました。この分かりやすい“シングリッシュ”が心に響きました。いっぺんにシンガポールが好きになりました。

子どもの頃チョウに魅入られる

私の趣味はチョウで、今でも野山を駆け巡っています。自分で捕獲したチョウは、標本箱に整理して並べます。ルリタテハのきれいな色彩、絶滅危惧種のギフチョウ、目玉模様をもつクジャクチョウやタテハモドキなどなど、飽きずに眺めています。その魅力は、自分の年齢とともに趣を変化させ深まっています。

チョウとの出会いは8歳の頃春休みに実家に遊びに

行った時のことです。千葉県の大きな農家でしたので、敷地内に桐畑がありました。そこに、優雅に時折舞っている青い蝶がいたのです。それを見た瞬間、「なんて綺麗なんだ！」と感激したことを、60年以上経った今でも鮮明に思い出します。そのルリタテハの青と白の筋が、目に焼き付きました。



ルリタテハ
青色の帯が鮮やか

出張したネパールのポカラで、非常に珍しいチョウが多く生息していて南方系のタテハモドキや北方系の高山蝶のコヒオドシが同じ場所において大感激しました。

出張中コンスタブルの絵に出会う

母が、「女学校の頃、セルロイドの下敷きに描いてあったこの絵が大好きだったの」と、画集を広げてよく私に語ってくれました。イギリスの画家コンスタブル(1776-1837)の緑の濃い田園風景画でした

ロンドン出張があり、仕事の合間をみて、大英博物館などを訪れました。そんなある日、トラファルガー広場のすぐ近くにあるナショナル・ギャラリーで、なんとこの絵の本物に出会ったのです。初めての対面でしたが、なにか無性に懐かしく久しぶりの再会でもあり思わず母を思い出しました。



コンスタブル 乾草車

そして、「そうだ、この絵のところに行ってみよう！」コンスタブルカントリーへ、出かけることができました。絵画にある小さな製粉所や大きな木々、そして池も昔のままでした。大事にしてきた自然に、人間の作った古い建物が調和していました。

三つ子の魂百までも

いつまでもチョウを傍らに年を重ね、素晴らしい人達との出会いを大切にしていきたいと思ひます。



シンガポール地下鉄
車内ポスター